

へきじゃしょうげん

## #54 關邪小言

作者：大橋訥庵（おおはし・とつあん 1816-1862）

刊行：安政4年（1857）



### 📖 解題

#### ■ 内容

『關邪小言』は江戸時代末期の西洋学術批判書。外国船の来航が相次ぎ、海防論議が盛んになっていった時代を背景に、徹底した攘夷精神を鼓舞することを目的として出版された。大橋訥庵は嘉永5年（1852）から執筆を開始し、楠本端山（平戸藩主に仕えた儒学者）が跋文を追加して安政4年に刊行されている。古くからある和漢の学問を棄てて、西洋学術のみの考え方に傾くことを心配し刊行されたという。



[041/4/1]

片仮名交り文で全4巻、4冊で構成されている。巻1は総論として儒学の長所と洋学の短所を比較。巻2では西洋が物事の道理や本質や天を知らないといふ非難。巻3では西洋はいかに仁義を知らず、いきいきとしていないかを反論。巻4は問いに答える形で自分の意見を述べる「或門」という文章形式で、東西の優劣是非を論評している。

片仮名交り文で全4巻、4冊で構成されている。巻1は総論として儒学の長所と洋学の短所を比較。巻2では西洋が物事の道理や本質や天を知らないといふ非難。巻3では西洋はいかに仁義を知らず、いきいきとしていないかを反論。巻4は問いに答える形で自分の意見を述べる「或門」という文章形式で、東西の優劣是非を論評している。

#### ■ 作者

作者の大橋訥庵は儒学者、尊王論者。名は正順、通称は順蔵、字は周道、訥庵は号。文化13年（1816）兵学者の清水赤城の四男として生まれる。いったん飯山藩士の酒井力蔵の養子となるが後に離別する。江戸に戻り、日本橋の商人大橋淡雅の養子となる。儒学を佐藤一斎に学び、天保12年（1841）に思誠塾を開いた。安政の大獄において処刑された儒学者の頼三樹三郎の遺体が埋葬もされずに打ち捨てられていることを見かね、門弟とともに小塚原

刑場まで行き、三樹三郎の遺体を棺に納め埋葬している。安政7年（1860）の井伊直弼の暗殺には関係しなかったが、その後の和宮の婚姻に強硬に反対し、文久2年（1862）1月の老中安藤信正襲撃事件計画（坂下門外の変）では中心的な役割を果たした。坂下門外の変の直前に別の挙兵計画が発覚し、捕らえられた。獄中で病気となり、宇都宮藩に預けられたが、同年7月12日47歳で死亡。「毒殺と伝えられている」（『明治維新人名辞典』吉川弘文館1981）と記載する資料もあるが、真偽は不明。

## 📖 本文を読む

< 版本 >

『關邪小言』第1巻～第4巻 思誠塾 1857 [041/4/1] - [041/4/4]

< 翻刻 >

「關邪小言」（『破邪叢書』第1集 神崎一作編 哲学書院 1893）

※当館未所蔵 国立国会図書館デジタルコレクション（デジタル送信）で閲覧可能

「關邪小言」（『明治文化全集』第15巻 日本評論社 1929）[081.6/5/15]

『校訂關邪小言』至文堂 1938

「關邪小言」（『大橋訥庵先生全集』上巻 至文堂 1939）

※以上2点当館未所蔵 国立国会図書館デジタルコレクション（デジタル送信）で閲覧可能

## 📖 参考文献

『大橋訥庵先生伝』寺田剛 至文堂 1936 [121.4/7]

『大橋訥庵』小池喜明 ペリかん社 1999 [121.54HH/14]

宮城公子「「誠意」のゆくえ」（『幕末期の思想と習俗』宮城公子著 ペリかん社 2004）[121.5PP/125] ※初出『日本史研究』285号 1986 [Z210/506]

徳田武「第5章 大橋訥庵逮捕一件」（『幕末維新の文人と志士たち』徳田武著 ゆまに書房 2008）[210.58TT/343]

※初出『明治大学教養論集』392号（2005） 明治大学学術成果ポータルで閲覧可能